

特定非営利活動法人

## おokayま人權研究センター・ニュース

発行 センター事務局 2012. 8. 10 第20号

### 岡映研、井上清の部落解放理論を検討 小畑会員報告

7月29日(日)1時30分から、岡山民主会館で、岡映研が開かれました。今回のテーマは、井上清の部落解放理論でした。小畑さんは、『部落問題解決過程の研究第1巻』所収の広川楨秀論文と鈴木良論文を紹介し、井上の問題を解明されました。

広川論文は、井上の見解が60年綱領の作成過程に対してもっとも大きな理論的影響力を持っていたことを明らかにします。井上は、1951年以来部落解放全国委員の中央委員を務め、60年綱領の作成に関与しました。

理論的には、あの部落差別に対して独占資本が「元凶」をなすという、独占資本元凶論が、井上の部落理論の核心であったことが、明らかにされます。井上は封建的遺制について具体的に分析することなく、部落解放を社会主義の実現とつなげて考える政治主義の典型ということになります。

鈴木論文は、部落差別を政治権力によって上から造り上げられたものという考え方が、この10年ほどの近世史研究の発展の中で一掃されたとします。そうした観点から井上の理論を見てみるとそれは典型的な「政治起源説」であり、同時にまた「経済関係＝生産関係還元説」であるということになります。鈴木説は、部落差別をもって、政治的な差別とするのではなく「社会的」差別であり、それは「えた」が特定の職分をになうという慣行のから生まれたのだといえます。

小畑さんの鈴木批判は、部落差別を「社

会的」差別とするという見方そのものへの批判であり、近世身分社会の画期をなした太閤検地(鈴木さんもそれを承認しておられます)が政治権力そのものであったことを強調されました。

私見を述べるのが許されるなら、封建的政治的差別が、なぜ直接権力的形態を取ることなく、社会的身分差別として現れるかという点については、封建的共同体と共同体メンバーの自律性の限界という論点から捉えられる必要がある、ということをつけ加えたいと思います。

また、井上清という人の政治的立場の激変、戦前の皇国史観、戦後のマルクス史観、70年代以降の毛沢東主義といった政治的立場の激変についても、井上論としては検討して欲しいという意見も出されました。

#### 教育研究会

8月4日「中学校公民教科書東京書籍版と育鵬社版の比較」と題して、小出隆司さんが報告してくださいました。結論だけいえば東京書籍版が「淡々とした」「常識的叙述」であるのに対して育鵬社版は、民族対立を「熱っぽく」表現して憲法改正や再軍備へ誘導しようという論旨があらわな論述になっている、ということになります。

注目すべき論点として、東京書籍に「一人ひとりが地球市民の立場」にたつ必要があるという指摘があるということに、小出さんは注意をうながしてくれました。(い)